水と文学 (13)

前東京都水道局理事　小泉　智和

ＮＨＫ大河ドラマの「武蔵ＭＵＳＡＳＨＩ」が終わります。

時折見ましたが、どうも女性が出てくる場面が多かったですね。原作の吉川英治「宮本武蔵」では、お通、お杉婆さん、朱美、お甲ぐらいだったと思いますが……。

要は、小説を更にお茶の間向けに脚色したドラマなのですから、かく有りなんと思います。

小説、ドラマとも良く出てくる僧沢庵は、武蔵と同時代の人間（没年同じ）で、郷里も山ひとえの近くですが、実際には武蔵と会った記録はありません。

本位田又八に到っては、創作上の人物です。しかし、東京帝大の本位田祥男氏から「本位田又八と同郷同姓であるために、学生から“又八、又八”という綽名をもって呼ばれ、甚だ迷惑である」と、朝日新聞の学芸欄で抗議され、英治は困ったと語っています。

英治は、随筆の中で「敢えて不敵になって、書きはしたが、小説が読まれれば読まれるほど、作家の創意と、正伝の史実とが、将来、混淆（こんこう）されてゆかれそうな惧れがある」と述べています。

英治の「宮本武蔵」は、武蔵が又八と一緒に関ケ原の戦に行った時から佐々木小次郎と決戦するまでで、最後の文は「波騒は世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は歌い雑魚は踊る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを」で終わります。

○　吉川英治の略歴

吉川英治は、明治25年、神奈川県久良岐郡中村根岸（現横浜市）で生まれました。本名英次（ひでつぐ）。父の事業の失敗で小学校卒業目前で中退。印章店の小僧、活版工、給仕、雑貨店の店員、土工の手伝、横浜ドックの人夫と、幾つもの職業を転々としました。

明治43年、ドックで重傷を負い、危うく一命を取り止めたのを期に、上京して蒔絵師の徒弟となります。

大正３年、講談社が募集した懸賞小説に応募、「江の島物語」が１等に当選。同10年、東京毎夕新聞社に入社。以後、

「親鸞記」、「鳴門秘帖」等を書き続けます。

昭和10年（43歳）から朝日新聞に「宮本武蔵」を連載、昭和14年にかけて1013回続き、爆発的な人気を獲得して、英治は国民文学作家と呼ばれるようになりました。同12年、毎日新聞の特派員として、中国に従軍、「太閤記」、「三国志」を執筆します。戦後、「新・平家物語」、「私本大平記」等を執筆しています。

杉本苑子が英治の唯一許した弟子であったことは、先の「水と文学（5）」で記したところです。昭和35年、文化勲章受賞。同37年、70歳で没しました。戒名「宗文院殿釈仁英大居士」で、府中市の多摩霊園に眠っています。

吉川英治

○　宮本武蔵略史伝

「水と文学」を書いているのですから、ここで宮本武蔵の史伝を書くのはちょっとおかしい気もしますが、英治の小説「宮本武蔵」は、佐々木小次郎との巌流島の決闘までで終わってしまいますし、一方大河ドラマの方はその後も続きますので、今少し武蔵を知るために、英治の「随筆宮本武蔵」から、武蔵伝を記しておきます。

宮本武蔵は史料の乏しい人物で、言い伝えの部分も多く、英治は「武蔵の史実は要約すれば、6.70行に尽きるものしかない」と言っています。

特に出生地については、「五輪書」に書かれた播州（兵庫県揖保郡太子町宮本、同高砂市米田町）と言う説と作州（岡山県英田郡大原町宮本）と言う説とがあります。以下

天正12年（1584）3月生まれ、幼名は弁之助、後に武蔵と称する。

13歳　有馬喜兵衛という武芸者と闘い、これに打勝つ

16歳　但馬国、秋山某と言う強力な兵法者に打勝つ

17歳　関ケ原に出陣（西軍・浮田中納言の軽輩な一兵士として）

21歳　京都一乗寺の下り松で、吉岡剣法の一門と試合

29歳　巌流島で、佐々木小次郎に打勝つ

31歳　大阪冬の陣、西軍・水野日向守の軍勢について参戦、32歳、夏の陣参戦

42歳　養子宮本三木之助殉死、44歳伊織を養子とする

51歳　小倉の小笠原家に逗留（養子の宮本伊織が家老として禄仕）
54歳　養子の伊織を具して、軍監として天草の乱に出征、55歳　島原の乱参戦
57歳　熊本の細川家に招聘される
62歳　熊本郊外の岩殿山の霊巌洞で死す（＊天正10年生まれ64歳とも云う）

生涯60何度かの試合に勝ちとおした武蔵ですが、人間武蔵として大成するのは、大阪夏の陣以後、姫路・明石へと移ってからです。

禅や茶に親しみ、絵を画き（枯木鳴鵙図〈＊重要文化財〉等）、そして、和歌も詠んでいます。中の一つに、「世の中はたゞ何事も水にして渡れば替る言の葉もなし」と言うのがあります。

さて、彼は死ぬ２年前洞窟に籠り、彼の集大成とも言うべき兵法の道、「五輪書」を書きました。全文は、地、水、火、風、空（仏教界において、宇宙の万物を構成するもととなる５要素）の５巻からなり、序文で、出生を述べ、地の巻で兵法の総論を書き、そして第２の「水の巻」では、身と心との自由、無碍天放（むげてんぽう）の境地、いわゆる自然なるままの水は方円にしたがうの道を説いています。以下の巻で、処身、哲学を説いています。

宮本武蔵像（大原町）

○　英治の胸中山水

英治の話に戻しましょう。彼は、昭和15年、２歳になる長男のために、何でも手に入る便利な東京よりも、多少不便でも自然環境の良い、都下吉野村（現青梅市）に土地を購入しています。移住は、同19年で、疎開のような形となりました。

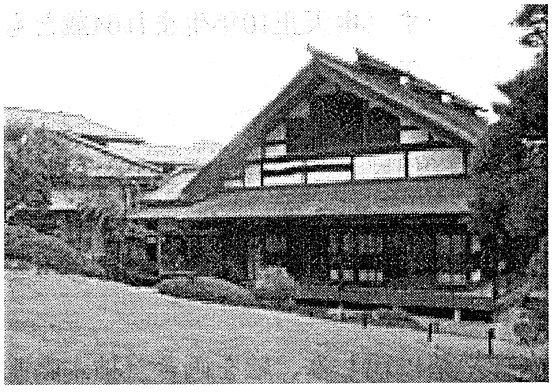
戦後は、２年間ほど執筆を絶ち、晴耕雨読を実施します。自らが書いた書の中で、下総・法典ケ原開墾でのこと、「水や土を相手に、ここへ肥沃な人煙をあげようとする治水開墾の事業も、人間をあいてに、人文の華を咲かせようとする政治経綸も、なんの変りもないことと考える。“そうだ、これはおれの理想とする目的と、偶然にも合致する”」と記し、そして「或る時、何か大きな発見をしたように、武蔵は伊織へいうともなく、

“きょうまでおれは、土や水に対して、烏滸がましくも、政治をする気で、自分の経策に依って、水をうごかし、土を拓こうとしていた”と、呻きだした。“間違いだった！水には水の性格がある。土には土の本則がある。その物質と性格に、素直に従いて、おれは水の従僕、土の保護者であればよいのだ”彼は今までの開墾法をやり直した。自然を征服する態度を改めて、自然の従僕となって働いた」と、著述しています。

英治はこの想い、水の従僕、土の保護者を、敗戦の日本、青梅の地で実践しようとしたのかもしれません。

且つ、彼は、武蔵事蹟の旅に出た時、「胸中山水という言葉がある。画人のためにつかわれているが、小説家にも実はこの胸中山水がある」と述べています。

「胸中山水」、「胸中故郷」とも言ってますが、英治が、多摩川が流れる山峡の地・青梅を選び、こよなく愛したのはこんな想いからだったのでしょう。



青梅市・吉川英治記念館